

形容詞述語文の過去形が 完了事態の評価を表す時

——その条件と表現性——

大 槻 美智子

キーワード：形容詞述語文、完了（終了）、評価、イ形、タ形、体験

1 はじめに

形容詞（形容動詞を含む）は状態を表すので、アスペクトを持たないと
言われる。しかし、「（食事が終って）ああ、おいしかった」のように、日
本語の形容詞述語文における過去形（以下タ形と言う）が、「動作の継続
過程や、完了という局面に運動する形で、主語の属性を過去形で述べる現
象」（浅野 1996、p.75 傍点・下線は本稿筆者）を持つことは、よく知ら
れている。この例につき、浅野 1996 は次のように述べる。

日本語の場合、食べるという動作の進行に添って「おいしい」「お
いしかった」というように、形容詞の表現を変える場合がある。料理
自体の属性を問題にするのであれば、中国語のように常に「今日の料
理はおいしい」だけでよいはずであるが、食べた直後に「ああ、おい
しかった」と言うことは自然な表現であり、「ああ、おいしい」とい
うことは逆に難しい。

このように、継続するできごと（食事）があり、そのできごと中に生じ
る話し手の感覚を現在形（以下イ形と言う）で表し、できごとの終了と運
動する感覚の終了を、発話時現在のこととしてタ形で表すタイプの文があ
る（図1参照⁽¹⁾）。そして、タ形は継続中の個々の時点での「おいしさ」
をトータルした、食事全体への「評価（できごとの質の決定）」を表現す
る。浅野はこれを「属性」と呼ぶ。たしかに属性と言えなくはないのだ

が、本稿では「評価」という言葉を使う。これは、「おいしい」以外の例も考え合わせた場合、タ形が「話し手にとっての意味・価値」を表現・伝達していると考えられるためである。これを図示すると、図1のようになる。図1のa～eは以下に掲載する当該文の特徴を示している。

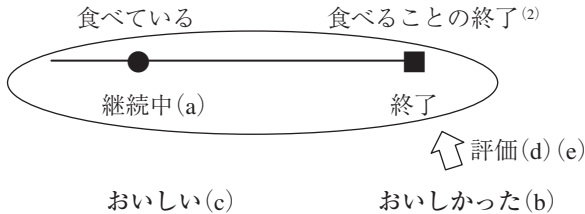


図1 感情・感覚とできごとの関係

- a 感情や感覚を誘発するできごとは、時間的な継続性を持っている。
- b 感情や感覚は、それを誘発するできごとの終了と連動して終了する。
- c 継続中の感情や感覚は現在形で、終了時はタ形で、対照的に表わす事ができる。

そのうえで、次のd・eが表現・伝達上の特徴になる。

- d 感情や感覚をタ形で表すことで、できごとへの評価となる。
- e 話し手の感情や感覚が、できごとへの評価となるので、それを聞手に持ちかけることができる。

上に述べたような特徴をもつ文は、ほかにも次の②～⑥のような例があり、日本語の形容詞述語文では普通に見られる表現である。また、この場合の、感情⁽³⁾ (感情／評価形容詞)・感覚⁽³⁾ (感覚／属性形容詞)の主体は、話し手(「私」)である。

できごとの最中

できごとの終了時

- | | |
|------------------------|----------------------|
| ① (食事の最中) ああ、おいしい。 | (食事を終えて) ああ、おいしかった。 |
| ② (海での遊びの最中) たのしい～。 | (海での遊びを終えて) たのしかった～。 |
| ③ (映画をみながら) おもしろい～。 | (映画を見終わって) おもしろかった～。 |
| ④ (外回りの最中) ああ、暑い～。 | (外回りが終わって) ああ、暑かった～。 |
| ⑤ (棘がささって) 痛い～。 | (棘を抜いて) ああ、痛かった。 |
| ⑥ (夕焼けを見ながら) ああ、真っ赤だ～。 | (夕焼けが終って) ああ、真っ赤だった。 |

①だけでなく、②～⑥の例をみても、(a)「海での遊び」「映画」「外回り」「痛み」「夕焼け」などできごとが継続している間は、(c)「たのしい」「おもしろい」「暑い」「痛い」「真っ赤だ(赤い)」などイ形で表し、(b)感情・感覚を誘発するできごとの終了と連動する当該の感情・感覚の終了は夕形で表現する。さらに、(d)夕形を通して、そのできごとが話し手にとってどのようなもの(意味・価値)かという評価を表す。評価であるので、(e)終助詞をとって聞手に持ちかける表現をとることはごく自然である(ああ、おいしかったね／たのしかったね／暑かったよ～／まっ赤だったよ、など)。

もちろん、夕形(過去形)なので、「以前はおいしかった」「あの頃はたのしかった」「昨日は暑かった」など、過去(回想)の出来事を回想して述べる用法はあるわけだが、ここにあげた①～⑥は、夕形にもかかわらず、できごとが終了した直後(発話時)に、感情・感覚もまた終了したものとして表現するとともに、それを以て、できごとそのものへの評価となっているところに特徴がある。

形容詞夕形が有する以上のような機能を、「完了評価機能」と呼び、その機能を有する文を「完了評価文」と呼ぶことにする。完了とは、継続していたできごとの終了直後の発話であること、評価とは、完了した事態への意味づけを行っていると感じられることによる命名である。

さて、以上のような種類の文の特徴や伝達上のニュアンス、使用できる形容詞等について考察したものは、まとまったものとしてはなかったように思う。そこで、次の2章では、誘因となる継続的なできごとの終了方法と、終了後のニュアンス(変化後の状態を含むか否か)を観察し、その結果わかったことを述べる。3章では、当該文に使用できる形容詞とできない形容詞があることと、その制限は、本章で見た形容詞の形態的特徴 a～c を持つか否かであることを確認する。

2 「完了評価文」の特徴と伝達上のニュアンス

さて、①～⑥の文における最大の特徴は、その感情・感覚が、誘発事態の「継続-終了」と連動して生じていることであった。ここでは、継続する事態がどのような方法で終了するかという観点から、イ・ロ・ハの三つに分け、併せて伝達上のニュアンスについても観察し、その結果わかったことを述べる。

(イ) 主体が行為を終了する

形容詞の場合、感情・感覚を有する主体と、感情・感覚をひきおこす対象（できごとやその中核にあるモノ）が存在しているわけだが、主体の行為ができごとを生じさせている場合、行為を終了することで、できごとを終了させることができる。図2によってその関係を示し、あとに（イ）に属する例文をあげる。

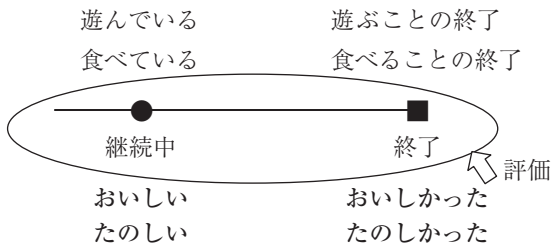


図2 (イ) 「主体による行為の終了」

- ① (食事を終えて) ああ、おいしかった。
- ② (海での遊びを終えて) たのしかった～。

ほかには、次のような例があげられる。

- ・(イタリアの青の洞窟から出てきて) すごく青かったね～。
- ・(夜の森の中を抜けて) ああ、暗かった～。
- ・(お風呂からあがって) ああ、気持ちよかった～。

以上の場合、対象の状態（料理の味、海、青の洞窟の水の碧さ、森の暗さ、お風呂の湯かげん）が変化するわけではなく、主体の行為の開始と終了によってひとまとまりの経験となったものに、意味づけ（評価）を行っている。（イ）の特徴としては、できごとが終了したあとの話し手の感情・感覚は問題にされない。これは、食事・イベント・場所・入浴という、それ自身完結して変化を有しない事物への評価であることによると考えられる。

(ロ) 対象の状態が終了(変化)する

主体の行為によってではなく、対象の変化や推移によって事態が終了する場合である。

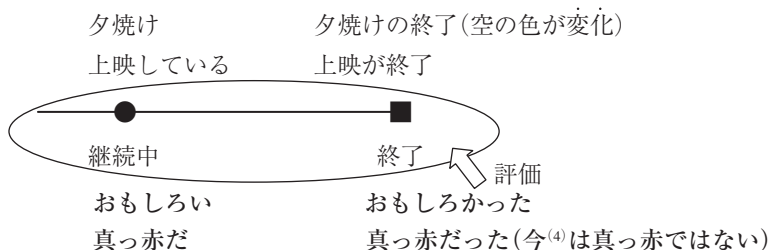


図3 (口)「対象の状態変化(終了)」

ここに属するものは、できごとが一つの完結したもの(③)か、その後の状態変化を有する(⑥)かによって、伝達上のニュアンスが異なる。

③(映画を見終わって)おもしろかった～。

映画はそれ自体が始まればいつか終るものであり、鑑賞する側の行為で終了するものではないため(口)に分類した。仮に、映画の途中で退席した場合、映画そのものを評することは難しい。「おもしろかった」と言うためには、映画の終了までを体験することが必要である。この場合、「おもしろかった」は作品への評価(意味づけ)であり、その後の感情変化は含まれない。

これと同様なものには、次のような例がある。

- ・(君が出発する)今までいつもそばに居てくれて心強かったよ～、ありがとう。
- ・(つまらない話が終って)ああ、長かった～。

⑥(夕焼けが終って)ああ、真っ赤だった～。

夕焼けは自然現象であり、終了した夕焼けはその後時々刻々姿を変える。夕焼けの場合は、その真っ赤な美しさが消えた直後にも対象自体に色の変化が起こるため、状態変化のニュアンスを含意できる。ほかには、次のような例があげられる。

- ・(強烈なライトが当たってそのまま過ぎて行った)眩しかった～。(今は眩しくない)

(ハ) 主体の行為で状態を終了(変化)させる

主体が、経験している状態(マイナスの意味のものが多い)を除去したり回避したりする行為を行うことにより、感情・感覚を終了(変化)させる場合である。

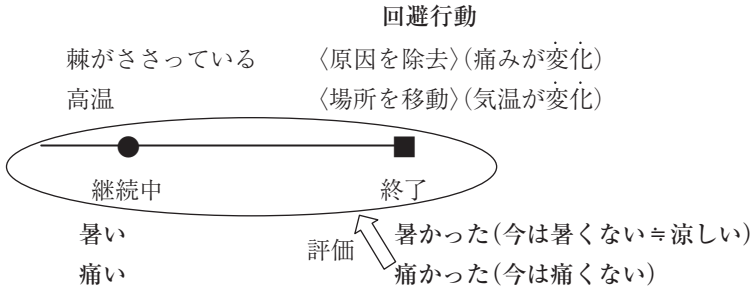


図4 (ハ) 「主体の行為でマイナス状態を終了」

④ (外回りから帰ってきて) 暑かった～。

外は高温多湿の状態が続いているが、そこから逃れて、たとえば、クーラーが効いた涼しい場所に移動してきたような状況が考えられる。行為主体は、その時同時に暑くない(≒涼しい)状態に変化している。「暑かった」は、外界の不快さに対する話し手の評価であると同時に、変化後の状態を含み得る。

⑤ (ささった棘を抜いて) ああ、痛かった。

棘がささっている間は痛いですが、痛さを回避する行為(「棘をぬく」)を行ったことで、痛さから脱して発した言葉。この時同時に行為主体は、「痛くない」状態に変化している。「痛かった」は、回避行為を行う前の状態や原因となる棘に対する意味付け(評価)である。また、変化後の主体の状態も含意できる。

ほかには、次のような例があげられる。

- ・「(汚ない部屋を掃除して) ああ、汚かった！」(今は汚くない)
- ・「(無理に着ていた小さいサイズの服を脱いで) ああ、窮屈だった～」(今は窮屈ではない)
- ・「(知らない人に追いかけて交番に飛び込んだ) ああ、こわかったよ～」(今はこわくない)

(ハ) では、主体の行動により、主体の置かれている状態に変化が生じる。タ形は、それまでの状態のあり方を表出するとともに、そこから脱した後の変化状態も含意できるのが特徴である。

以上、感情や感覚をひきおこす事態をどのように終了させるかについては、三つのタイプがあることを見てきた。もちろん、これらは典型的なパ

ターンを示したものであるので、一つの形容詞で複数のタイプを持つものもある。

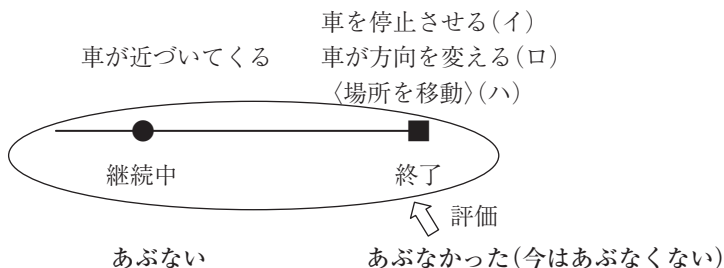


図5 「あぶない」と(イ)(ロ)(ハ)

(イ)は話し手が運転者であり、停止という行為により迫り来る危険を回避した場合、(ロ)(ハ)は話し手が車にぶつけられそうな立場にあり、このうち(ロ)は相手がハンドルを切るなどして危険が去った場合、(ハ)は車の進路から話し手が別の場所に移動した場合である。「あぶないーあぶなかった」の間の時間は物理的には短いかもしれないが、重要なことは、継続とその終了が話し手に認識されていることである。

また、2章の例文からわかるように、完了評価文を形成する形容詞は、情意をベースにした「たのしい・おもしろい・あぶない／心強い・こわい」や知覚をベースにした「暑い・痛い・まぶしい・気持ちいい・窮屈だ・おいしい／真っ赤だ(赤い)・青い・暗い・長い・汚い」など、形容詞の種類に基本的には制限はない。

変化後の状態が含意されるかどうかということについては、対象や主体のおかれている状態が変化する場合は含意され、映画・小説・料理・行事など一つの作品として完結するもの場合は含まれないと言えそうである。

3 文成立の条件と該当する形容詞

先に、当該の文を作る形容詞は、いわゆる形容詞の分類(感情・感覚・評価・属性)の別なく成立するということを述べた(質形容詞・状態形容詞の区別でもない)。とはいえ、すべての形容詞が完了評価文を作るわけではない。

ここでは、形容詞を、知覚をベースとした形容詞と情意をベースとした形容詞とに大別し、それぞれ、完了評価文が作れる形容詞とそうでない形容詞がどのようなものかを検討する。

はじめに、喜びの感情を表す二つの形容詞「たのしい」と「うれしい」を比較したい。感情形容詞の中で、完了評価文を作れる形容詞とそうでない形容詞の典型だからである。

⑦ (デートが終わり帰り際に) ああ、たのしかった～。

⑧ ? (デートが終わり帰り際に) ああ、うれしかった～。

「たのしい」の場合は、デートの最中にも時々「たのしい」と認識し、デートが終わった時にはデートというできごと全体を「たのしかった」と評価できる。一方、別れ際に「うれしかった～」と言われたら、それはデートというできごとへの評価ではなく、デート中にあったなにか一つのできごと——たとえば、飲み物をもってきてくれたこととか、寒いからとマフラーを巻いてくれたこととか、あるいはそもそもデートに誘ってくれたこととか——に対する喜びの反応と解されるのではないだろうか。だから、別れ際に「うれしかった～」と言われたら、相手は「なにがうれしかったの？」と問い返すことになるだろう。このような両語の違いについては、先行研究に指摘がある。たとえば藤田 1991 は、両語の違いを次のようにまとめる (p.80)。

「たのしい」

- ・ 誘因 (行動) と感情は時間を共有する。
- ・ 誘因 (行動) が実際に行われなければ、感情は生起しない。
- ・ 感情がいつ生起し始めたかは、主体には意識されない。

「うれしい」

- ・ 感情は誘因が認識された直後に生起する。
- ・ 誘因が実際に生起しなくても、感情は生起する⁽⁵⁾。
- ・ 誘因は主体によって認識された瞬間だけが対象とされる。

藤田 1991 の分析によれば、「たのしい」は、「誘因 (行動) が実際に行われなければ、感情は生起しない」し、「誘因 (行動) と感情は時間を共有する」とある。言いかえれば、「たのしい」は、主体「私」が実際にそして継続的にそのできごとを経験しなければ使えないということである。

そういえば、実際に味わわなければ「おいしい」も「おいしかった」も言えないという点では「たのしい」と同じであった。

一方、「うれしい」は、「誘因が認識された直後に生起する」感情であると言う⁽⁶⁾。言いかえれば、継続相のできごとには対応せず、できごとをひとまとまりの完結相として認識し、それに反応する形容詞と言えるのではないか。継続的なできごとに対応しないということは、できごとの終了時を表現する必要はない。だから「うれしい」のタ形が過去を表す用法しかないということも了解できるのである。

「実際にそして継続的に経験する」ことを、「体験」⁽⁷⁾と呼ぶとすると、完了評価文の成立には、主体の「体験（持続的な経験）」が必要であるといえることができる。それは1章で、完了評価機能を有する文に共通する特徴として取り出した、

a 感情や感覚を誘発するできごとは、時間的な継続性を持っている。

b 感情や感覚は、それを誘発するできごとの終了と連動して終了する。を、主体の側から書き直したものにほかならない。

このように考えてくると、おそらく、知覚をベースとした形容詞（感覚形容詞・属性形容詞）は、基本的に完了評価文となりうると考えられる。なぜなら、知覚による判断である、「明るい・暗い・青い・うるさい・苦しい・眠い・まぶしい・冷たい・気持ちいい、など」は、必ず、主体の「実際の持続的経験（体験）」を必要とするからである。

一方、情意をベースとした形容詞（感情形容詞・評価形容詞）の中には、さきほどの「うれしい」のように、継続ではなく完結相として提示された事物に反応するものがいくつかある。「悲しい、恋しい、憎い、ほしい」や「めずらしい、めでたい、いい、正しい、いやだ、のぞましい／かしこい、きらいだ、好きだ」などである。これらは、完了評価機能をもたない（あるいはもちにくい）形容詞であり、下の例のように、いずれもタ形は過去を表してしまう。

- ・（友達の引っ越しを見送って）悲しいよ～（現在）
悲しかった～（過去）
- ・（芝居を見終わって）ヒロインがきらい！（現在）
ヒロインがきらいだった（過去）

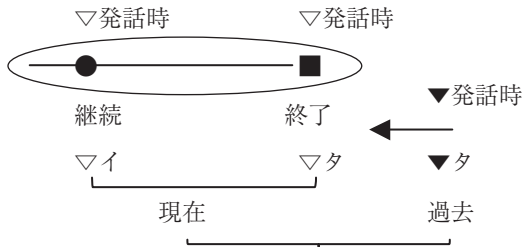
一方、「たのしい」は、実際に今あるできごとを持続的に体験すること

ができる形容詞である。この章では触れていないが、「きれいだ・かわいい・すごい・すばらしい」なども同じで、今実際に対象を観察し味わって発することができる言葉である。よって、次のように現在完了時の評価を与えることができる。

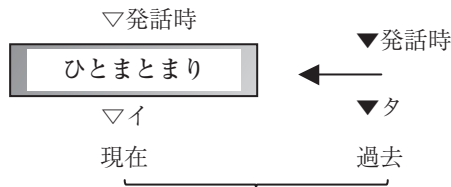
- ・(映画を見終わって) ああ、きれいだった～／すごかった～／すばらしかった
- ・(ショーが終って) ああ、かわいかったなあ～／きれいだった～

完了評価文を形成する形容詞のイ形・タ形のあり方を、図示すれば次のようになる。完了評価文には、できごとの終了現在を表すタと過去のタが存在している。一方、「うれしい」などに代表される、完了評価文を作らない形容詞の場合は、過去のタしか存在しない。▽▼の発話時は、その時点での現在を表す。

〈完了評価文〉



〈非完了評価文〉



4 さいごに

3章では、できごとの終了と連動して終了する感情・感覚（タ形）が、できごとへの評価でもある「完了評価」の形容詞述語文の成立条件は、以

下の三点の要素を持つ形容詞であることが確認できた。

- a 感情や感覚を誘発するできごとは、時間的な継続性を持っている。
- b 感情や感覚は、それを誘発するできごとの終了と連動して終了する。
- c 継続中の感情や感覚はイ形で、終了時はタ形で、対照的に表わす事ができる。

「a 感情や感覚を誘発するできごとは、時間的な継続性を持っている」
「b 感情や感覚は、それを誘発するできごとの終了と連動して終了する」という二つの特徴は、言語主体の側から言うと、そこに、できごとの継続性と時間を共有する「体験」が必要であるということにはほかならない。当該文を形成できる形容詞は、主体が実際にかつ継続的に行う「体験」を前提とする形容詞である。それは結果として、「継続-終了」に対応するためには、「c 継続中の感情や感覚はイ形で、終了時はタ形で対照的に表わす事ができる」という要件をもつことになる。一方、完了評価文を形成できない形容詞は、継続性のないひとまとまりの事象に対する表出であり、タ形は現在における完了を示すことができないものであった。

最後に、条件 c については、アスペクトの観点から付言しておきたい。

「c 継続中の感情や感覚はイ形で、終了時はタ形で、対照的に表わす事ができる」というのは、「一連の動的事象の継続と終了に対応して」ではあるが、主体の感覚や感情が、継続の局面にあるのか、終了の局面にあるのかを、形容詞のイ形・タ形が、形態的に表し分けているということにほかならない。すでに浅野 1996 が指摘しているように、感情・感覚が、継続相のものか完成相のものかを表し分ける形態があるという点で、アスペクトとして考察すべきではないだろうか。

本稿では、形容詞のアスペクトという観点から当該文について論じるものではない。しかし、浅野 1996 の指摘に耳を傾ける例として付言するならば、動詞にも次のような例があげられる。

- ・(山で一時行方不明になった子どもたちが見つかった) ああ、心配したぞ～。
- ・(好きな人がこちらにくるかと思ったが、途中で方向を変えた) ああ、ときどきした！
- ・(電車に乗り遅れそうになったが無事に乗れて) ああ、焦った～

これらの情意動詞も、情意の契機となる事態との関係が、今まで見てきた「完了評価機能」の形容詞述語文と全く同じ構造をしている(図6参照)。

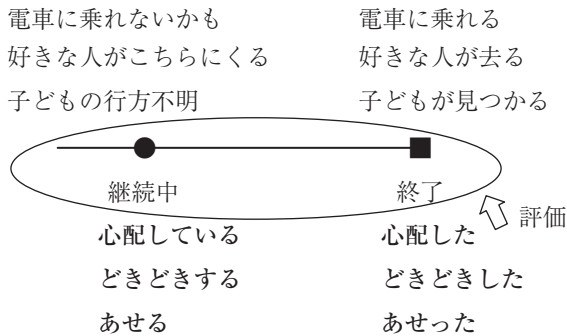


図6 動詞「誘発事態と情意の関係」

ここに属する語には、ほかに「どきどきする」「はらはらする」「いらいらする」「ほっとする」「頭にくる」「あきれる」「[がっかりする]」「驚く」などがある。これらの感情動詞も形容詞と同じアスペクト形式を持つということは、興味深い。

図6と関連させていうと、「心配した」の代わりに「よかった」とか「安心した」と言うこともできる。「心配した」は「心配している(心配だ)」が終了したという表現だが、「よかった」「安心した」は、心配が終わり、「よい」や「安心だ」という状態が新しく発生したことを表現している。しかし、その時にタ形が用いられるのはなぜかという疑問が生じる(図7参照)。

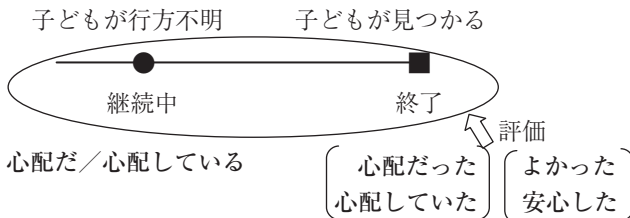


図7 「よかった/安心した」

本稿で対象にした完了評価文は、継続中にイ形で示されたのと同じ形容詞によって、できごと全体をタ形で評価するものであった。一方「よかつ

た・安心した」は、変化後の状態で事態を評価⁽⁸⁾しており、この点が大きく異なる。もちろん、継続事態の「体験者」が評価主体であるという点では共通しているし、継続していたマイナス状態が、なんらかの方法で好転してマイナス状態が解除されたわけなので、タイプとしては（ハ）に属することになる。ではなぜ一方は変化前の形容詞を評価語とし、一方は変化後の、言わば含意されるだけだったものを評価語とするのだろうか。

この例文の場合は、〈行方不明〉だった相手およびその関係者への表出のためと考えられる。関係者を含む相手に、自分が「心配していた」ということを語るより（場合によってはもちろん可能なのだが）、「よかった／安心した」とプラスの面を積極的に語ることで、迷惑をかけた、心配させたという、相手の心情的な負担を減らすということがあるように思われる。また一方で、負担を与える相手がいない状況、たとえば自分が試験に合格するかどうかわからないといった状況でも「心配した～」「よかった～」は両方使用できる。以上のことを考え合わせると、「よかった」「安心した」が言えるのは、定延 2008 が言うように「ある情報が体験として語れるかどうか」（p.46）、語る価値がある情報かどうかということが鍵になるのだろう。ここでは、このような質的転換を行った「よかった～／安心した～」については、ひとまず以上のような考察にとどめておきたい⁽⁹⁾。

本稿で考察してきた完了評価文は、継続的なできごとの推移と終了点を持つ。終了点は、主体の行為や対象の変化などによってもたらされる。継続的なできごとを「体験」する主体が、時間を共にする中で抱いた感情・感覚の終了を示す（タ形）ことで、できごとの意味や価値を評価するという構造をもつものであった。

この完了評価文に使われる形容詞群では、たとえば「おいしい」「いたい」「たのしい」「(空が) 赤い／真っ赤だ」などのイ形表現は、できごとの進行中の感情・感覚であることを表すのみで、できごと全体の意味付けをすることができない。継続性のあるできごとまるごとの評価は「おいしかった」「いたかった」「たのしかった」「赤かった」とタ形で表すほかないのである。

逆に、完了評価機能のない形容詞群とは、「挨拶を返してくれてうれしい」「友達と別れるのが悲しい」「母の言うことはいつも正しい」「あんたみたいな人はきらいだ」のように、イ形でひとまとまりの事物の評価ができる形容詞であり、完了したできごとの性質を決定づける用法は不要だと

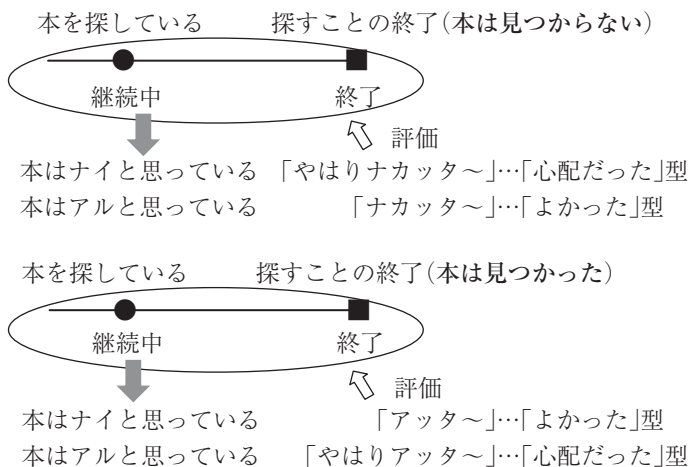
いうことが言える。

すなわち、完了評価機能を持つ形容詞は、完了評価のタと過去のタの二つを持ち、完了評価機能を持たない形容詞は完結相評価をイ形で行うので、タ形は過去を表すので十分ということになるのである。

注

- (1) 浅野 1996 (P.82) の図を利用して本稿筆者が作図した。
- (2) 浅野 1996 に書かれている (P.82) ことだが、何を以て「食べることの終了」と言うかは、本人の認識の問題である。「おいしかった」が発せられる、食事の終了時とは、たとえば、料理をすべて食べ終えた時点はもちろんだが、料理を残した時でもそれ以上食べる意志がなければその時が終了時である。逆に自分は料理を食べ終えても、食事を共にしている人が食べ終わってはじめて「おいしかった」ということもある。つまり「おいしかった」は、話し手の認識としての終了時を指している。
- (3) 感情・感覚という用語について説明する。川端 1983 に拠り、形容詞を情意に基づくものと知覚に基づくものの二つに分類し、情意に基づく形容詞には、感情形容詞・評価形容詞を属させ、知覚に基づく形容詞には感覚形容詞と属性形容詞を属させる。そのうえで本稿では、情意に基づく前者を「感情」、知覚に基づく後者を「感覚」と呼ぶ。
- (4) ここで「今」を使うからと言って、「真っ赤だった」を過去ということはできない。真っ赤な空が終わったということは同時に真っ赤ではない状態に入ったのであり、それは同じイマである。ただ、言表としては発話時を「今」というほかないということに過ぎない。その他の「今」も同じである。
- (5) この項目は、「明日ある予定の遠足に対して『うれしい』と言うことはできても、『たのしい』ということとはできない」と述べている (藤田 1991 P.86) ことを根拠としていると思われる。この指摘は興味深いのが、本稿では「うれしい」に関しても主体が何らかの経験をしている場合が考察対象なので、この項目は検討外となる。
- (6) 柴田ほか 2003 の「ウレシイ・タノシイ」(執筆担当：山田進) にも「ウレシイは〈あることがらを快として認知した瞬間に生じる感情〉であると言える」とある。
- (7) 定延 2008 の用語に拠る。同書 P.38 に「体験は状態をデキゴト化する」「私たちがその状態を『生きる』ことによって、その状態は、私たちの人生の一部となり、立派なデキゴトになるのだ」とある。これにより、本稿では、時間をかけて対象の状態と関わった主体の経験を「体験」と呼ぶことにする。
- (8) 「よかった」「安心した」は、変化後の状態を表しているのであって、完了したできごとへの評価ではないという見方もできるが、「よい」「安心する」をタ形で表すのは、完了する事態とともに生じた感情であることを示していると考えられる。
- (9) 感情・感覚の形容詞とは言えないので、本稿では扱わないが、「ない・ある」

のイ形・タ形の関係は、「心配だった」型（継続中の心情で意味付ける）と「よかった」型（事態終了（変化）後の心情で意味づける）の二面を持つという意味で興味深い。



引用文献

- 川端善明 1983 「文の構造と種類 - 形容詞文 -」『日本語学』第2巻第5号
PP.128-134
- 藤田佐和子 1991 「『たのしい』と『うれしい』- 誘因と感情の時間的關係を視点として -」金沢大学国語国文 16号 PP.86-75
- 浅野友貴 1996 「形容詞述語文におけるアスペクト的表現」言語・地域文化研究 第2号 PP.75-92
- 柴田武ほか 2003 (初出 1982) 『ことばの意味3』平凡社ライブラリー PP.119-127
- 定延利之 2008 『煩惱の文法』ちくま新書 730

(本学教育学部教授)